情報無償提供時代の到来（２００６・２・１４）

フリーペーパーといわれる冊子が急増している。駅舎や空港の構内、コンビニエンスストアの店頭、病院や学校の玄関などに山積みになっている冊子、街頭で手渡しによって提供されている冊子、新聞折込みで家庭に配布される冊子など種類は様々であるが、共通する特徴は無料で配布されていることである。

そのようなフリーペーパーの情報を総合しているウェブサイトで勘定してみると、日本全国を対象に配布している冊子が四五、特定の地域を対象にしている冊子が七〇〇近く登録されているが、実際はそれを大幅に上回る種類が存在すると想像される。その発行部数もギネスに世界最大発行部数のフリーペーパーと認定されている『ぱど』の一二五二万部から、特定の階層を対象にした約五〇〇〇部という規模まで広範に分布している。

無料だから内容が中途半端というわけでもなく、たまたま手元にあるリクルートが毎週一回発行している『Ｒ二五』の内容を紹介してみると、今年の異常気象の解説、政治・経済・音楽・流行などについてのニュース、東山紀之へのインタビュー、有名な作家などによる現代社会の評論など、五〇ページの冊子に情報が満載されており、「オトコを刺激する情報マガジン」という副題が大仰ではない内容である。

そのような充実した内容の冊子が無料で配布されている仕組は、説明するまでもないが広告である。しかし、『Ｒ二五』の場合で広告は一〇ページ程度であるから、それほど広告で一杯という印象でもない。このような冊子だけではなく、情報を無償で提供する傾向が急増している。もちろん、これまでも民間放送は存在していたから、情報の無償提供が皆無であったわけではないが、やはりインターネットの登場が加速したのである。

グーグルは世界のあらゆるウェブサイトに蓄積されている情報を無償で一瞬にして検索することを可能にし、グーグルニュースは多数の新聞や雑誌に掲載された情報の一部を無償で入手可能にしている。グーグルマップにアクセスすれば、現状では一部の地域だけであるが、詳細な地図とそれに対応する衛星写真も無償で入手でき、その地図でレストランやホテルなどを簡単に検索することもできる。

さらに驚異はグーグルアースであり、世界のあらゆる場所の衛星写真を自由自在に拡大して三次元像として鑑賞することができる。一方、アマゾンは過去に出版された主要な書物をデジタル情報として自由に閲覧可能にする壮大な構想を進行させているし、それらを利用するインターネットの料金も低下する一方である。そしてついにスカイプの登場によって、電話でさえ、従来と比較すれば無料といえるほどの金額に低下してきた。

これらは情報を共有するという視点からは素晴らしいが、既存の著作権法に依存する社会からは反発がある。そして、世界には二種の人類しか存在しない、グーグルを利用する人間と利用しない人間であるという言葉もあるように、民間企業が古代アレキサンドリアの大図書館に匹敵する存在になる。それはグーグルとアマゾンを合成したグーグルゾンという言葉が情報社会の危険を内包した未来を象徴する言葉になっていることにも反映している。

この無償が広告の代償として成立しているということは、結局、最後は我々が物財やサービスを購入するという方法で支払っているのである。そのように結論すれば、情報社会の今後は、膨大な無償の大海を、どのように我々が航海していくかに依存している。無料ほど高価なものはないという格言を想起しながら航海する必要がある。